

佐渡の貴重な植物群落 7

小佐渡：川茂の天然スギ林

伊藤邦男・斉藤昌宏

昭和59年度（1984）、県自然環境保全地域の候補地である「小佐渡：川茂の天然スギ林」について調査をした。調査は昭和59年（1984）8月9日、調査者は県自然環境保全審議会専門調査員の伊藤邦男・斉藤昌宏である。調査には県環境部自然保護課の平慎三氏が同行し協力を頂いた。

また、下川茂の大杉山の天然杉の巨木の切株の太郎杉と次郎杉の道案内として下川茂の古宮定義（こみやさだよし・昭和7年生まれ）氏が同道頂き、切株が確認された。ここに厚くお礼申し上げる。

今回の調査により判明したことは、

1. 「川茂の天然杉」は屋敷林や社林として散在的に分布するだけで、まとまった「川茂の天然林」は認められなかった。
2. 現存する川茂の天然杉の最大木は下川茂の「五所神社の大杉」（村指定の文化財）で、これ以外にこの杉に匹敵する巨木は存在しない。
3. 川茂に伝承される大杉山の杉の巨木である「太郎杉」・「次郎杉」の切株が現存し確認されたこと。
4. 温暖、湿潤な立地を反映して、植林されたスギ林が下川茂に美林としてみられること、などである。

なお、佐渡の天然スギについては、伊藤邦男・北見秀夫（1975）による「大佐渡：小杉立の天然スギ林」及び、伊藤邦男・斉藤昌宏（1984）により「大佐渡：船山の天然スギ林」の報告がある（『佐渡植物風土記』（1989）に掲載されている）

I 新潟県の天然スギ林

新潟県の天然スギの概要について近藤治隆（1979）は次の様に解説する。

すなわち、「スギは日本の固有種で、その自然分布は、北は青森県から南は屋久島におよび、生育の中心はブナクラスとされる。天然スギは、尾根や斜面に点在する 경우가多いが、群生する所もある。新潟県では、北部の蒜場山、俎倉山、御神楽山、西部の青海、黒姫山、佐渡の大佐渡山系に分布する」と記す。（文献・第2回自然環境保全基礎調査・植生報告書・1979・新潟県）

また、新潟県内のスギ分布を、図1に示すが、分布図作成者の関省吾（1987）は「地図上の実線は、林弥栄（1951）によるスギ天然分布域を示すが、杉は自生か栽植か不明瞭なものが多い」と説明する。（引用文献・新潟県植物分布図集・第8集・1987）

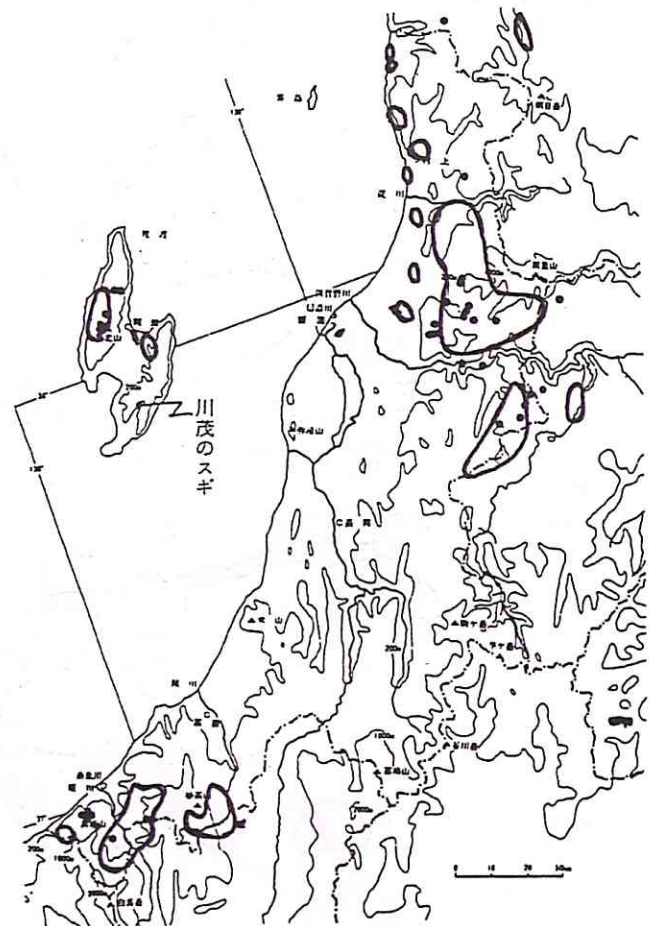


図1 新潟県のスギ分布・地図上の太線はスギ天然分布域
(新潟県植物分布図集・第8集・1987)

II 川茂の杉御林

川茂のスギは江戸時代、幕府の「杉御林」であった。川茂の杉御林について、郷土史家の佐藤利夫は次のようにのべている。

「下川茂（赤泊村）は両津の羽黒とともに、佐渡で杉の産地として有名である。この杉は通称「川茂杉」といわれ、伐採したあと苗を植えなくても切株からの芽生えが育って成木となるとされている。川茂杉はクマスギの系統で木の質もよい。

『四民風俗』（18世紀なかば）に「耕地の外は持林の杉木を伐り挽板・枇板（こば）等にいたし売候」とある。村の貴重な産物であった川茂杉も、明治以後、伐採がすすみ、そのあとには成長の速い島外産の杉が植林され、今では純粋な川茂杉といえば、五所神社の御神木の杉のほか、ごくわずかし

かないという。

地元の話では、川茂杉は羽茂川より南、つまり赤泊側の山にしか生えなかったものだそうで、伝説の残る太郎杉があった大杉山も、五所神社横の天狗塚から赤泊へ出る道をしばらく登り、そこから西へ入ったところにある。大杉山というのは通称で、地字は「元山」及び「太山」である。ここは江戸時代の御林であった。

羽茂川沿いの改修工事などのときには、地下1メートル位の所から、時代はそう古いとは思われない神代杉が出てくる。杉山とか杉ヶ沢という地名もあるから、近世以前から天然の杉林は川茂には相当あったものと思われる。開発が進むと天然林は次第に姿を消してきたが、用材の供給地として佐渡奉行所が特別に保護したのが御林である。下川茂と羽黒の杉御林は島内一を誇り、『佐渡年代記』には寛政元年(1789)禁裏造業用材として、この2つの御林の杉を伐り出したことが記されている。(引用文献・赤泊史上・川茂杉・pp. 618-620; 赤泊教育委員会・1982)

III 川茂杉の巨木

1. 五所神社の大杉

現存する川茂の天然杉の最大は、五所神社の大杉である。下川茂のほぼ中央、羽茂川の左岸の五所神社は、羽茂川にかかる朱塗りの橋を渡るとすぐ境内に入って向って右側の大杉は樹高30m、胸高幹周5.3m、胸高幹径1.7mの大杉で、御神木でもある。

赤泊教育委員会編の『赤泊村の文化財』には、

指 定	赤泊村指定天然記念物
名 称	五所神社の大杉
指定年月日	昭和51年3月27日

所在地 佐渡郡赤泊村大字下川茂

所有者 五所神社

管理者 五所神社

樹高30m、目通り5.21m、樹齢約800年、川茂杉は自生の杉とも言われ、その特徴は切り株から芽が伸びて育っていく萌芽性と雪に強いということで、その質の良さは有名である。

これは川茂の気候・土質が杉の生育に適しているからと思われる。下川茂の杉は、幕府御林としても、佐渡では羽黒の杉と並んで称され、弥彦神社の鳥居にもなった。一番大きな木は太郎杉と呼ばれ、切り株に20人乗って酒盛りが出来たと言われている、と記される。

本殿の前方の鳥居周辺には、胸高直径1m以上の大杉は神木の大杉(径1.7m)とその他2本(径1.15m・1m)の3本で、その他は幹径17~20cmの小杉がおよそ百数十本ある。その他ヒノキアスナロの大木(幹径65m・樹高25m・樹齢200年)が1本、その他ヒノキアスナロ7~8本、ホオノキ、イヌシデなどがみられた。

「五所神社の大杉より大きな杉は、赤泊村腰細の春日神社の大杉であった。この大杉の2本は7~8年前に伐られた。一本の杉の価格は、1,500万円であった。赤泊村で一番大きな杉は“五所さんの大杉”だ」と地元で聞いた。

佐渡は天然杉の島とも呼ばれるように、天然杉の林や巨木が、今なお残存されている。現存する天然杉の美林は、大佐渡の「小杉立の天然スギ林」と「船山の天然スギ林」であり、いずれも県の重要植物群落に指定されている。

天然杉の島であった佐渡には、かつての巨木の遺存種とみなされる大杉が各所にみられ、そのほとんどは文化財・天然記念物に指定されている。

表1. 佐渡における天然杉の巨木

名 称	天然記念物指定	所 在 地	樹 高	胸高幹周
金峰神社の大杉	市 指 定	両津市北五十里	40 m	8.5 m
関越えの仁王杉	無 指 定	相川町関	40 m	7.3 m
毘沙門天の百足杉	無 指 定	金井町平清水	36 m	6.7 m
三光の杉	町 指 定	佐和田町市野沢	30 m	6.5 m
長谷の三本杉	県 指 定	畑野町長谷	50 m	6.4 m
安産杉	村 指 定	新穂村瀧上	30 m	6.15 m
五所神社の大杉	村 指 定	赤泊村下川茂	30 m	5.21 m
稲荷神社の大杉	町 指 定	真野町小川内	30 m	5.1 m
しだれ杉	村 指 定	新穂村田野沢	28 m	4.95 m
羽黒神社の大杉	無 指 定	金井町安養寺	42.3 m	4.8 m
とのさま杉	村 指 定	新穂村青木	16.2 m	4.02 m

2. 大杉山の太郎杉

五所神社の裏山、通称「大杉山」、地字は「元山」及び「太山」で、江戸時代は杉御林であった。この大杉山の太郎杉について、次の様に伝承される。『赤泊村史』(1982)には「下川茂に太郎杉という、切り株に畳が12枚も敷けるという大杉があった」と記され、また『佐渡草木風土記』(1985)には、「村人が総出で半年がかりで伐られた太郎杉。太郎杉の切り株にムシロ8枚を敷いて、樵(きこり)13人が輪づくりで酒盛りをした」とある。

天然の巨木である太郎杉の絵図が昭和58年(1983)にみつかった。『川茂大杉山・太郎木切株踏査』の絵図(図2)である。昭和10年(1935)8月25日、羽茂の岡崎文泉、中原豊蔵、藤井甚吉、地元の風間茂樹、大坪老人の5人によって踏査された寸法入りの切株絵図。絵図によれば、切株の長径は3間(5.4m)、短径(3.6m)。長径3間×短径2間で6坪、畳12畳敷。角(すみ)をはってもムシロ8枚は敷ける。切株にはムシロ8枚敷いて樵13人が輪づくって酒盛りをしたのは、事実であった。

昭和59年度夏、この太郎杉及び次郎杉が探査された。(昭和59年8・9) いずれも北向きの斜面、次郎杉は海拔290mの地に、そこより北東方面300mはなれ、海拔290m地に太郎杉の切株が見つかる。(図3)

太郎杉の切株の中央の木部のほとんどは朽ちて大穴となり土に覆われている。ただ前方の外周部は厚さ20cm、地表より高さ1mが残され、10人抱えの幹周の15mの巨幹の切株が確認された。地中に埋もれた地下部は、かたく材は朽ちていなかった。

IV 川茂のスギ林

天領佐渡。川茂の天然スギ林も「杉御林」として保護されたが、明治以降急速に姿を消していった。今回(1984年)の調査ではまとも天然スギ林はなかった。ただ「川茂のス

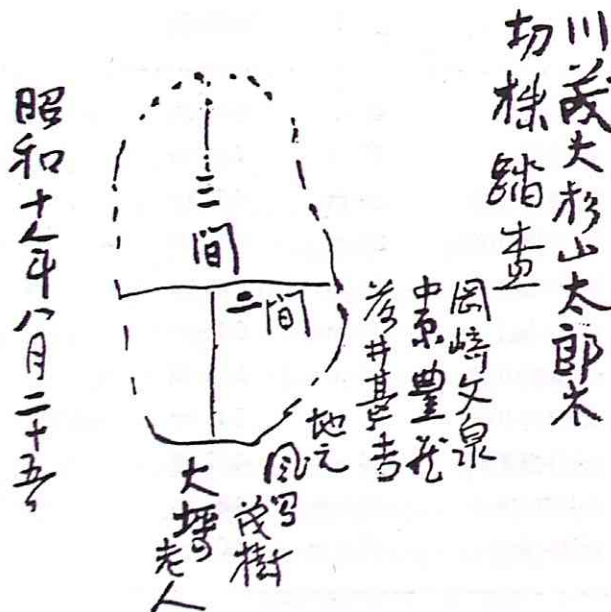


図2 「川茂大杉山：太郎杉切株踏査・昭和10年(1935)」絵図

ギは2回伸びる」といわれるように、春の新芽が伸びるだけでなく梅雨時にも芽が伸びる。羽茂川上流の温暖・湿潤な下川茂一帯、特に羽茂川の左岸側の北向き斜面はスギが非常に繁茂する立地である。現在は、明治の後半～大正にかけて造林されたスギ林がよく育っている。

その造林スギ林のひとつ栗津(くりつ)五一氏(大正7年生まれ)所有のスギ林を調査した。(図5)栗津氏の先代が、スギの種子を採取し育苗して植栽したスギ林で、明治の終り頃のものという。隣の羽茂村との村界いの「掘り割・ほりわり」の手前の川茂地内、奥ゆき40m・長さ130m、面積およそ5,000m²のスギ林で現存する川茂スギの代表的な林のひとつである。その植生の組成は表2に示す。

造林されたスギ林で、高木層構成種はスギ一種である。樹高32m、胸高幹径21~51cm、平均幹径35cmのスギの単生林である。

亜高木層は貧弱でスギ、ヒノキがごくわずかに散生する。低木層、草本層の植被率はそれぞれ20%、90%で林床植物はよく繁茂している。

大佐渡山系の海府川斜面の天然スギ林は、ミズナラ、ホオノキ、オオカメノキ、ツクバネソウなどのブナ林要素や、タムシバ、チシマザサ、ヒメモチ、オオバクロモジ、エゾユズリハ、ハイイヌガヤ、ハイイヌツゲなどの日本海側のブナ林要素が生育し、特徴的にマルバフユイチゴをよく伴っている。このスギ林は大佐渡山系の天然スギ林の組成と異なるのは立地が低海拔で植栽林であることによる。

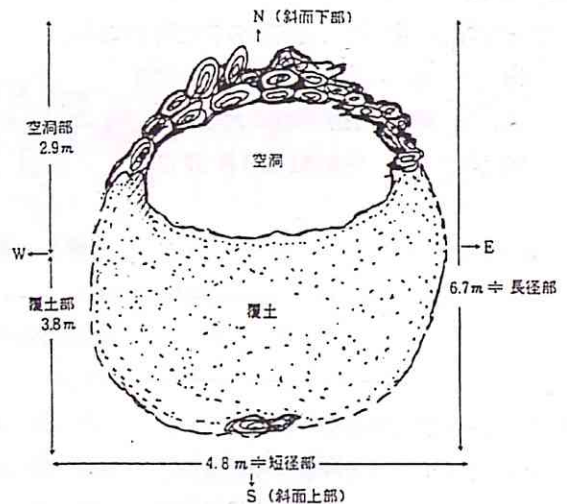


図3 下川茂：大杉山の太郎杉の切株跡断面図 (1984・8・9・原図 伊藤邦男)

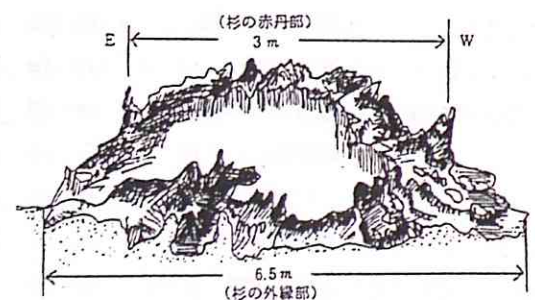


図4 下川茂：大杉山の次郎杉の切株跡 (1984・8・9・原図 伊藤邦男)

表2. 小佐渡：下川茂のスギ林（下川茂：栗津五一所有・杉植栽林）

階層	優占種	高さ	植被率	種数	環境
高木層 B ₁	スギ	32 m	90 %	1	スギ植栽林
亜高木層 B ₂	スギ	15 m	2 %	2	海拔 150m
低木層 S	ウリノキ	2 m	20 %	15	方位 S70°E
草本層 K	ムカゴイラクサ	0.8 m	90 %	41	傾斜 23°
					面積 20×20 m ²
					出現種数 52 種

B₁ スギ5・5（胸高直径37・33・46・45・51・43・29・48・38・26・44・31・30・27・23・35・43・33・35・31・20本、平均胸高直径34.6cm）

B₂ スギ+、ヒノキ+

S ウリノキ2・2、ウド1・2、ヤマグワ+、ヒメアオキ+、ムラサキシキブ+、タンナサワフタギ+、フジ+、アワブキ+、ノリウツギ+、シロダモ+、ヤマモミジ+、オオバクロモジ+、ハナイカダ+、センノキ+、ヤマウルシ+

K ムカゴイラクサ4・3、ドクダミ2・2、ツリフネソウ1・2、チヂミザサ1・2、オオバクロモジ+、オオカニコウモリ+、ヌスビトハギ+、ヒトリシズカ+、ツタウルシ+、ヤマイヌワラビ+、ヒカゲイノコズチ+、サカゲイノデ+、イワガラミ+、エンレイソウ+、ハナイカダ+、ヒメアオキ+、ゼンマイ+、ケイタドリ+、ミゾソバ+、フジ+、オニドコロ+、ヤマノイモ+、ウマノミツバ+、ノササゲ+、ハエドクソウ+、ウマノアシガタ+、ウリノキ+、アマチャヅル+、イワガネソウ+、タチシノブ+、モミジイチゴ+、キカラスウリ+、ムラサキシキブ+、ウワミズザクラ+、サンカクヅル+、ヤブコウジ+、ミヤマナルコユリ+、トキワイカリソウ+、ヒヨドリバナ+

林縁 クガイソウ、オオイトドリ、ホオノキ、ワラビ、フキ、ツルマサキ、ツタウルシ、キカラスウリ、フジ、サンカクヅル、ポタンヅル、ヤマニガナ

（伊藤邦男・斉藤昌広：1984・8・9調査）

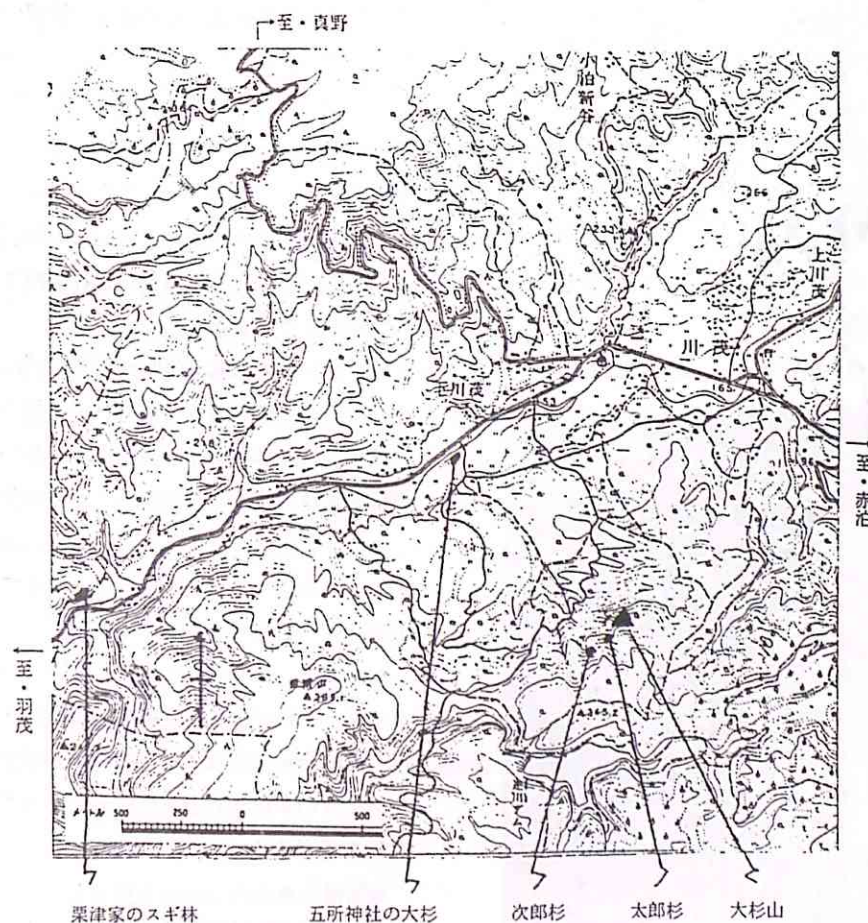


図5 小佐渡：下川茂の大杉山の太郎杉・次郎杉の切株（海拔290m・北向き斜面）の配置図（1984・8・9調査）

林床はヤマモミジ、オオバクロモジなどの日本海側のブナ林要素もみられるが、わずかで、暖帯要素のシロダモ、ヤブコウジ、タンナサワフタギなどの生育もみられる。そしてなによりも林床構成種としてウリノキ、ノリウツギ、センノキ、ヤマウルシ、ヌスビトハギ、ムラサキシキブ、モミジイチゴなどの林縁マントの中・低木構成種が多い。また林縁マントのつる植物のフジ、オニドコロ、ヤマノイモ、ノササゲ、サンカクヅル、キカラスウリ、イワガラミなどが多い。林床は林縁構成の陽生植物が、なお生育できる明るい立地である。

ムカゴイラクサ、ツリフネソウ、チヂミザサ、ドクダミなどがよく目につくが、これは湿潤な立地を反映しているのである。

（初出『佐渡植物風土記』1990）

（いとう くにお）

新潟県自然環境保全審議会専門調査委員
〒952-12 新潟県佐渡郡金井町千種106-3)